

『基督教研究』



高度の学術雑誌で五十年以上の歴史をもつものはそう多くはないと思う。『基督教研究』の創刊号ができたのは、大正十二年十一月であるから、この秋でちょうど満五十二年にな

る。神学部は同志社創立のとき余料として出発したから、その歴史は来年で百年になるが、そのなかばから同人をおもな執筆者とするこの雑誌が発刊されたわけである。大正十二年といえは関東大震災のあった年であり、そのためにこれは一ヶ月おくれで発刊されたと編集後記に記されている。大正十五年九月にライプツィヒ発行の神学雑誌の巻頭にハースは半頁を費やして『基督教研究』を紹介している。戦時中の紙不足により出版界に十分な紙の支給がなかった時も、これはその業績が評価され、従来と同様にその支給を受けることができた。

さてこれはどのような意図のもとに発刊されたのであろうか。これについて当時の神学部長芦田慶治は発刊の辞のなかにつぎの二点をあげている。一つはわが国のキリスト者の宗教経験に基づいた思想的表現としての神学の実現であり、二つはキリスト教についての学的知識を広く世に普及させることであると。

創刊号の論文は、大塚節治「神学の性質の概観」、浜田与助「永生に関する哲学的考察」、カーブ「原始基督教に於ける教会の意味」、杉浦儀一郎「原始基督教の背景―密儀教―」、クロウチ「経済問題に対する教会の態度の変遷」(周再賜訳)、本宮弥兵衛「宗教教育の遺傳学的基础」である。第二号には新しい執筆陣としてビー・エフ・シャイヴリー「宗教々育の哲学」、片桐哲「パレスチナにおける原始民族と其宗教」、富森京次「天災と宗教文化」、金子白夢「ホイットマンの詩に現れたる宗教思想」、有賀鉄太郎「宗教における分類の問題」、第三号にはイ・エス・カーブ、「新約聖書における知識の意義」(其二)、魚木忠一「十四五世紀基督教会の二大傾向」、ヴイテ「最近独逸に於ける宗教運動」が登場し

た。そのちラルネデ「我國に於ける神学教育」、菅田吉「教会の宗教学的的一考察」、森川正雄「プロテニススの事蹟」、蘭川四郎「ロバート・ブラウニング」、中島重「基督教と社会問題」、杉山元治郎「農村社会問題と農村伝道」、山谷省吾「使徒パウロと彼の書翰」(新約特殊講座)その他があらわれた。第五卷第二号は滿五十二年にわたる同志社における教職生活を終えて帰米するラーネッド教授に退職記念号としてささげられ、昭和三年三月に刊行された。巻頭に柔和と知性にあふれた面影をしのぶ写真がかかげられ、かれの祈りが記されている。それ以後同人として竹中勝男が加わり、ほかに執筆者として二宮源兵、浅地界、今井新太郎、清水安三、ヴィルヘルム・パウク、日野真澄、今井仙一、平井政夫、御木本隆三、今泉真幸、神田盾夫、大島豊、ケース、九里要三、村岡景夫、物井常五郎、海野幸徳をあげうる。これまでにあげた執筆者だけをとりあげても、それぞれが神学、教会、教育社会事業、文学の領域にあって、開拓者としてあるいは指導者として活動した人々でありかれらの思想的結実が『基督教研究』にあらわれたことを思うと感慨が深い。

昭和八年以降新しい執筆者として高橋虔、山崎亨、森本芳雄、加藤謙爾、原田信夫、平石善司、嶋田啓一郎、村上俊、松山三郎、小田実が論文を掲載している。第十五卷第一号は故声田慶治記念号として昭和十二年十月に刊行されたが、はじめて日本にバルト神学を紹介した同氏が、バルト「ローマ書講解」の翻訳にあたった様子がえがかれていて興味がある。このための会合は毎週金曜日に行われたが、朝の九時から夜九時までにおよんだという。昭和十八年十一月第二十卷第四号として日野真澄教授記念号が発行されたのち、昭和十九年四月第二十一卷第一号として「宮川実践神学講座記念」、同二十一年三月に第二十二卷第一号として「海老名日本神学講座記念」、同年十二月に同二号として「小崎基督神学講座記念」が発行された。ここに日本神学創設の萌芽をみる事ができよう。

昭和二十三年六月であり、それ以来神学部における実践神学的関心は一層深まったということができよう。昭和二十五年一月の第二十四卷第一号には、同氏の「現代における教会のメッセージ」や民族重太郎「イスラエル天地創造説話について」が掲載されている。昭和二十五年以降現在の神学部教授山崎亨、土居真俊、グウィリム・ロイド、遠藤彰、緒方純雄、飯峯明、竹中正夫、幸日出男、土肥昭夫、樋口和彦、石井裕二、深田未来生、野本真也、橋本滋男、平野節郎、藤代の論文が掲載され始めた。梶嘉一郎の教育学に関する論文もある。昭和三十三年三月の第二十九卷第三・四号は夏期教授者協議会特集であり、第三十卷第四号以後しばらくの間一回位英文号が発行された。昭和三十九年六月の第三十三卷第二号は特集「産業社会における教会の責任」、昭和三十九年十一月の第三十三卷第三号は特集「神の民——その聖書と歴史における意味——」、昭和四十年六月の第三十四卷第一号は特集「聖餐論の史的諸問題」であった。

つぎの半世紀に向かって創刊の意図である日本人による独自の神学の建設とキリスト教に関する学的普及のため、同人は決意を新たにしていく。

(藤代泰三・大学神学部教授)